

がヘボンより实际的であつた。

昨平成十一年十一月五日、市大浦舟病院(正式には横浜市立大学医学部附属市民総合医療センター)に『シモンズ博士記念碑』が設立された。記念碑は新病院の落成記念日に市大医学部同窓会より贈られたもので、高さ二・七八米、巾一・四八米の白御影石仕様である。アーチ型の上部に博士の肖像がはめ込まれ、下部に荒井、井出両氏の説明文が刻まれている。なお『シモンズ博士記念碑』設立記念講演会が平成十二年五月横浜で酒井シヅ、荒井保男両先生によって行われた。

横浜市大病院は南区浦舟町のほかに金沢区福浦にもあり、後者は正式には横浜市立大学医学部情報センターと呼ばれるが、此処には十三年前の昭和六二年(一九八七)四月、医学部福浦移転開校時にヘボン博士記念碑が設立された。博士像のほか、杉立義一氏所蔵の揚州周延画の『ヘボン手術図』の錦絵が信楽焼の落着いたタイル貼りで飾られている。シモンズ碑だけでなく、ヘボン碑も是非鑑賞されることを希望する。

中野操文庫について

長門谷洋治

中野操先生(一八九七〜一九八六)はわが国医史学のリーダーとして大きな功績を遺された。軍医として数年間、中国な

どに滞在されたほかは大阪市で開業医としての忙しい日々を送られる一方で、医史学の普及発展に尽力された。『皇国医事大年表』『大阪蘭学史話』『大阪医学風土記』などの名著を刊行される傍ら、のちに日本医史学会関西支部となつた杏林温故会を同志とともに立ちあげられるなど、関西をわが国医史学の一大拠点とされた。多方面にわたつて史資料を積極的に集められ、それらを整然と分類・保管された。そして折に触れてそれを公開展示され、同業者、後学者には惜しみなく史資料を閲覧・貸与された。とくに今まであまり注目されていなかった医師番付や医療に関する錦絵を系統的に集められ、それらを印刷に付し新たな分野を拓かれた。

幸いなことにこれらの貴重な蔵書・史資料は戦災などに遇うこともなく、良い状態で保管されてきた。先生が長逝されたあと、各方面からこの中野コレクションが、散逸することなく一カ所に集められ、かつ公開されるように望む声が強くなった。幸い遺族のご理解とご英断でそのことが実現された。大阪市立中央図書館内にある大阪市史編纂所(西区北堀江四丁目、電話〇六一六五三九一三三三三)に「中野操文庫」として一括保管されるに至り、平成十年にはその目録もでき、同年十月には希望者には閲覧も可能となつた。先生自身のや、関係者から贈呈された論文抜刷や諸講演の記録、スクラップなど、だぶつた部数のあるものもそのまま悉皆的に収集されており、六千八百十件、一万三千四百六十点に及ぶ。小生が長年にわたつて探していた一書もこの文庫にあることを発見し、

早速利用させていただいた。この文庫とほぼ同時期にやはり蔵書家として知られた宗田一先生のコレクションが、京都の国立日本文化研究センターで公開されたことと合せ、我々の受ける恩恵は大である。ことに「中野操文庫」は天文二十一年(一五五二年)と記された古医書の写本、幕末から明治初年の医師番付四十余枚などが注目されるが、現代に至るまでの広範囲がカバーされているのが特長といえよう。

「中川五郎治顕彰碑」について

松木 明知

平成十年(一九九八)五月に筆者が会長として函館市で主催した第九九回日本医史学会の主題の一つは中川五郎治と北立系の種痘法に関してであった。

この年はジェンナーが牛痘種痘法について著書を公刊してから丁度二〇〇年になり、またジェンナーの種痘法をシベリア経由で日本に伝えた中川五郎治の歿後一五〇年になるという節目に当たっていたからである。

中川五郎治の歿後一五〇年を記念して、彼が活躍し、そして歿した松前の地に顕彰碑を建立した。学会前日の一九九八年五月十六日に英国ジェンナー博物館のピーソン館長や松前町、松前町教育委員会などの大勢の関係者を迎えて除幕式が

盛大に行われた。

重さ十二トンの自然石の台座の上の顕彰碑は縦一二〇センチ、横二〇〇センチ程の黒御影石で、洵に立派である。その建立場所は中川五郎治の両親と彼が眠る法源寺の墓地に近い。ここは観光道路に面しているため、松前城を訪れる多くの人たちが必ず眼にするところである。

この建碑によって、これまで一般の人たちは殆ど知られる所がなかった中川五郎治の業績が少しでも知られるようになるれば、顕彰碑建立者の一人として、これに過ぎる喜びはない。碑文は次の通りである。

中川五郎治顕彰碑

中川五郎治は本名を小針屋佐七(おばりやさしち)といい、一七六八年(明和五)青森県下北郡川内町に生まれた。一八〇七年(文化四)エトロフ島の幕府会所に勤務中、ロシア船の来襲に遭遇し、シベリアへ拉致された。五郎治はシベリアでの艱難辛苦に耐え、一八一二年(文化九)の帰国時、牛痘種痘法を習得し、ロシア語の牛痘種痘書を持ち帰った。五郎治伝来の種痘法は松前、箱館、秋田、そして津軽で普及されたに留まったが、その情報は遠く京都や大阪に伝えられた日本の医学界に大きな衝撃を与え、以後の日本の牛痘普及を大いに促進させた。

彼は一八四八年(嘉永元)に松前で歿し、同町の法源寺の両